

問題・解答 用紙番号	22
---------------	----

の解答用紙に解答しなさい。

国 語

〈受験学部・学科〉

3科目型 受験者	3科目型と2科目型の併願受験者
法学部、国際学部、経済学部、経営学部、現代社会学部、 理工学部(住環境デザイン学科【理系型】・建築学科・都市環境工学科)、 農学部【文系型】(食品栄養学科・食農ビジネス学科)	
2科目型 受験者	
法学部、国際学部、経済学部、経営学部、現代社会学部、 理工学部(住環境デザイン学科【文系型】)、看護学部、 農学部【文系型】(食品栄養学科・食農ビジネス学科)	

問題は100点満点で作成しています。

I 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(五五点)

大正期においては、「大正デモクラシー」の機運とも連動して、「家庭」の改良や「デモクラシー化」が知識層のあいだでしばしば論じられていた。

その題材の多くは、明治期の「家庭」論の延長線上にあるものだった。たとえば夫婦間の愛情の確立や相互の尊重、また家事の合理化といったテーマである。

この時期のリベラルな「家庭」改良論の特徴のひとつとしては、^A「子ども本位」を押し出す傾向があったことがあげられる。たとえばキリスト教者で経済学者の安部磯雄は一九一七(大正六)年に、「家庭」は「子供本位」を目指すべきだと述べている。なぜなら「家庭」の主な役目は子どもを「教育」して社会に送り出すことであり、それは「国家に対して尽すべき義務」だからであるという。

大正期は、『赤い鳥』の創刊をはじめとして、子どもの「真心」を^な讀^まえた童謡や児童文学が隆盛した時代でもある。ここで子どもは、大人と異なる純真な存在であるとみなされ、しばしば理想化された。子どもの個性や感性を尊重する新教育運動が^①タイトウし、成城小学校、明星学園など、特

色がある学校が建てられたのもこの頃であった。

もつとも「家庭」の改良論にみられた「子ども本位」は、一種の妥協の産物でもあった。社会学者の湯沢雅彦は、「子ども本位」の主張に、夫婦の平等が唱えられなかったことへの代償行為的な側面があったことを指摘する。湯沢によれば、政治（戦前に女性参政権はなかった）、教育の面で男女の不平等があった当時の状況では、夫婦の実質的な平等を説くのは難しい。そのため「デモクラシー」への志向は、「まずは非難が少ない子どもを擁護する主張に結びついた」という。「子供本位」を唱えた安部は、「夫本位」、「妻本位」よりも、「子供本位」の「家庭」が「最も弊害の少ないことである」と述べている。大正期の児童文学、童謡の書き手の多くは男性であり（たとえば北原白秋）、子どもとともに母親の母性もしばしば称賛された。

一方、当時の女性たちは、主婦の多忙さのように、「家庭」におけるさまざまな現実的な問題に直面することになった。そのせいもあり、女性知識人たちは一九一〇年代前後から、恋愛の問題から女性の経済的自立の問題、さらに女性のケア役割の社会的価値など、現在でもアクチュアリティのある議論を形成していた。それは「個人」としての女性の生き方と、当時の彼女たちのライフコースに x に結びつけられていた「家庭」をどのように位置づけるかという問題でもあった。

一九一一年（明治四四）年に、評論家・女性運動家の平塚らいてうらによって、『青鞥』という雑誌が刊行された。当初は女性作家を取り上げる文芸誌としてホツソクしたが、反響と反発が高まるにつれて、女性差別、貞操、墮胎など、政治的問題とも絡んだ女性の問題が論じられるようになった。「原始、女性は美に太陽であった」という、平塚のよく知られるフレーズは、同誌の創刊の辞に記されていたものである。

もちろん『青鞥』以前にも、女性の政治活動やフェミニズム運動の先駆者となった女性たちはいた。たとえば自由民権運動で多数の政治演説を行った岸田俊子（自由民権運動には女性の参加者も少なくなかった）、日本キリスト教婦人矯風会を創設して廢娼運動などにも尽力した矢嶋帽子などがあげられる。とはいえ『青鞥』に集った女性たちは、ジャーナリズムなどで「新しい女」として大きく注目を集めることになった。いったい当時、何が新鮮に映っていたのか。

彼女たちは、明治後期に広まった女子高等教育を受けた世代だった。女子高等師範学校（一八九〇〔明治二三〕年、現お茶の水女子大学）に続き、一九〇〇年代には、東京女医学校（一九〇〇〔明治三三〕年、現東京女子医科大学）、女子英学塾（一九〇〇年、現津田塾大学）、そして平塚も卒業した日本女子大学校（一九〇一〔明治三四〕年）などが次々と創設された。

とはいえこうした高等教育を受けても、彼女たちには中等教育以下の教員や文筆業以外には、経済的に自立できる職業がほとんどなかった。当時の女子の中等教育機関である高等女学校では、良妻賢母教育が行われており、「家事」や「裁縫」がカリキュラムに組み込まれていた。

『青鞥』に集った女性たちは、こうした社会状況や良妻賢母教育、そして「家庭」に結びつけられていた自分たちのライフコースに「個人」として大きな抑圧を感じていた。そのため、『青鞥』に掲載された彼女たちの自己表現は、同世代の女性読者の圧倒的な反響を呼ぶことになった。同誌には次第に、当時の家制度的な結婚生活や「家庭」についても批判的な論考が載せられるようになる。

たとえば平塚は一九一三（大正二）年に「世の婦人達に」という論考で、当時の結婚生活を痛烈に批判した。平塚によれば、「個人として自覚した現代の婦人」にとって、温和や貞淑といった良妻賢母道徳はもはや単純に受け入れられるものではない。結婚生活も少し紐解いてみれば、そこにあるのは「愛」ではなく、生活の保障のために「雑用に応じ」、「夜間は淫売婦」として夫に仕える女性の姿である。自分たちはそうした現状から目が覚め、「婦人の真生活」を採求する途上にあるというのであった。

当時は自由な男女交際が承認されておらず、お見合い結婚に恋愛的な要素が組み込まれていく程度だった。そして結婚後の女性には、貞淑な良妻賢母であることが求められていた。『青鞥』に集った女性たちはこうした現状に対し、「個人」としての自覚を打ち出した。そして自由な恋愛を主張し、ときには美談し、男性の所有物としてではなく、自我の確立としての貞操の価値を論じたのだった。

こうした「個人」をベースとした議論は、当時においては新鮮かつ奔放なものとして受け止められた。ジャーナリズムは好奇のまなざしで、彼女たちの恋愛や飲酒などに関するゴシップ記事を掲載した。彼女たちの主張は、私生児を増やし、家族の秩序や風紀を破壊するという批判もなされた。

実際には、『青鞥』に集った女性たちは、結婚や家族そのものを否定したわけでは必ずしもなかった。彼女たちは、当時としては斬新だった同棲や、親の意に反した恋愛をしながらではあったが、一夫一妻制的な「家庭」生活の実践者となっていた。牟田和恵はこの点について、彼女たちは「穩健」で「保守的」にさえみえる」と述べている。彼女たちの「個人」としての主張や実践は、まずは当時の上層階級で y だった、権威主義的な家族の秩序に対して向けられていた。

とはいえ彼女たちの「個人」であることの自覚は、恋愛によって実現した「家庭」に対しても向けられていた。^c 評論家の岩野（遠藤）清が一九一四（大正三）年に発表した「個人主義と家庭」では、この問題がより詳細に論じられている。

岩野清によれば「家庭」は、「個人」の生活上の都合と「愛」によって結びつけられる空間である。そのため「個人各のための家庭」があるのであり、「家庭のための個人」があるわけではない。

こうして、「個人」であることを自覚した男女は、「愛」を「不断の努力」によって維持しようと努める。しかし「愛」の結びつきは絶対ではない。彼ら彼女らは、それが永遠に続くわけではないかもしれないという不安から逃れることはできない。

とはいえ岩野清によれば、このこと自体は否定されるべきではない。必要なのは、「個人主義を基礎とした新らたなる家庭」である。「個人」を抑えるのではなく、むしろそれを前提としたほうが、「相互の理解と同情」がノードウ的に進む。

もちろん、家族成員の各々の目指すところが違えば、衝突が起こることもあるだろう。とはいえそれが常態化するわけではない。「個人主義」は排他的な思想ではなく、「自我の発展充実につとめると同時に、自我をさまたげない範囲の他の人間の行動に対して圧迫関渉を与えないという意味」であるという。

岩野清の議論は、「個人」であることと「家庭」を営むことのバランス、その衝突の可能性に目を向けたものだった。彼女はこのあと、夫で小説家の岩野泡鳴（岩野泡鳴）との同居請求訴訟（泡鳴の浮気が原因で別居していた）で注目を集めることになる。夫婦間の愛情がないにもかかわらず妻の座にこだわる姿は『青鞥』のメンバーにも形式主義的だと批判されたが、彼女の目的は、当時の法体系のなかで可能な限り妻の権利を主張することでもあった。「個人」と「家庭」のバランスの問題、とくに権利の意識の問題については、戦後初期の民主化論でも大きなテーマになる。

『青鞥』は世間からのバッシングに加え、メンバーたちの恋愛や結婚、育児などによる多忙さも重なり、一九一六（大正五）年に廃刊となる。しかしそのすぐあとに同誌で活躍した論者たちを中心に論争が繰り広げられた。テーマとなったのは、今日でもしばしば問題となる、「母」への経済的保障についてであった。

この論争は、^D母性保護論争という名で知られている。 z のは、作家の手謝野晶子が一九一八（大正七）年の『婦人公論』で発表した「女子の徹底した独立」という論考だった。

手謝野はここで、当時のドイツなどで展開されていた母性保護運動を批判し、女性の自立の必要性を主張した。手謝野によれば、結婚と出産は、男女ともに経済的に自立する能力をもつべきである。そのため妻が夫に経済的に依存したり、また国家が妊娠出産期の女性を経済的に保障したりすることは望ましいものではない。「生殖の責任は徹頭徹尾ⁱⁱ、夫婦相互が果さねばなりません」という。

これに対して反論したのが平塚らいてうだった。平塚によれば母親の経済的自立は「余程特殊な労働能力」がある者でなければ難しい。手謝野がいうように結婚と出産が、男女ともに経済的自立を果たしてでなければできないものであるならば、大半の人はあきらめてしまうだろう。むしろ女性は母になることによって、「社会的な、国家的な存在者」となるのであり、妊娠、出産、育児期の経済的保護は国家がなすべきだという。

手謝野はこの主張に対し、一部の貧困女性への支援は容認したが、国家による経済的保護にはあくまで反対の立場をとった。こうした手謝野に対して平塚はさらに反論を続ける。平塚によれば、手謝野は経済的自立を狭い意味に捉えており、「婦人の労働生活と母としての家庭生活との間に起

る避け難き矛盾争闘」を理解していない。女性の経済的自立は、育児を「公的事業」とみなし、国家が母親に対して「充分なホウシユウ」^④を払うことによつて成り立つ。そうすることで「家庭生活」と「職業生活」のあいだで引き裂かれている女性の苦しみも解放されるのだという。

平行線をたどる両者の議論であつたが、さらにここに評論家の山川菊栄^{きくさ}が参入した。彼女は議論の整理と、両者への総合的な批判を試みた。

山川によれば、女性の経済的自立も母性の保護も重要であり、両者をともに目指すほうが、女性の地位向上の助けになる。しかし仮に実現したとしても、それは根本的な解決にならない。なぜならこうした問題の根源には、女性に「家庭」の家事という不払い労働を担わせてその立場を弱くさせる資本主義経済の構造があるからであり、これを直視しなければならないという。この主張は、山川の社会主義者としての立場の表明でもあつた。

彼女たちの主張はそれぞれ、国家と家族の関係、そして育児の社会化など、今日にも連なる論点を含んでいた。この論争がなされていたとき、与謝野、平塚、山川はみな育児を行つており、それぞれの生活実感をともなつた議論でもあつた。

Ⅰ 彼女たちの議論からもうかがえるように、一夫一妻制の「家庭」の建設は、もはや明治期に有していたような革新的な意味合いは（とくに女性知識人にとっては）薄まつていた。Ⅱ 「家庭」はたとえ恋愛による結婚で営まれたとしても、家事や育児といった「主婦」としての現実的な問題が山積みだつた。

Ⅲ 女性史家の三鬼浩子は戦前の女性知識人が「母」にこだわつた理由について、職場の不平等や生活の困難、そして参政権がないことなど、変革が難しい問題に直面するなかで、「だれも否定しようがない女性性＝自己の身体性＝『母性』」に頼らざるをえなかつたからだを指摘している。Ⅳ

しかし「母」であることや子どもを産み育てることは、「富国強兵」^かに適つていたことでもあつた。Ⅴ そして現実には「家庭」が営まれるようになるなかで、国家は「家庭」や「母」に対しての^⑤カイニユウを次第に強めていった。

(本多真隆『「家庭」の誕生』 一部改変)

問一 二重傍線部①～⑤と同じ漢字を含むものを、次のア～エのうちからそれぞれ一つ選びなさい。

- ① タイトウ
ア 財産をキントウに分配する
イ 彼は早くからトウカクを現した
ウ 問い合わせがサットウする
エ 長年にわたり王が国をトウチする
- ② ホツソク
ア 彼からのシヨウソクが絶えた
イ 文化祭を通してケツソクが強まる
ウ 最後の説明はダソクだった
エ 一触ソクハツの事態を招く
- ③ ノウドウ
ア 彼が犯人であるとの説がノウコウだ
イ 期日までに物品をノウニユウする
ウ 各国のシユノウが東京に集まる
エ 特殊なギノウを身に付ける
- ④ ホウシユウ
ア 暴風ケイホウが発令される
イ がんばったのでホウジをもらう
ウ 実績に応じてホウキユウが上がる
エ 他人の作品をモホウする
- ⑤ カイニユウ
ア 今でもカイコンの念に駆られる
イ ヤツカイな問題を解決する
ウ 機嫌を損ねた相手をカイジユウする
エ 強いジカイの念に駆られる

問一 波線部 i・ii の言葉を適切に使った文を、次のア～エのうちからそれぞれ一つ選びなさい。

- i 機運
ア 政治改革の機運が熟する。
イ 彼は機運で会議に出席した。
ウ 機運を持って問題を解決すべきだ。
エ 私には行動を始める機運がある。
- ii 徹頭徹尾
ア 彼の予想は徹頭徹尾当たった。
イ 先日読んだ小説は徹頭徹尾傑作だった。
ウ 計画は徹頭徹尾未完成に終わった。
エ 彼の意見には徹頭徹尾反対だ。

問二 空欄 x z に入る最も適切な言葉を、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

- | | | | | | |
|---|-------|---|-------|---|---------------------------|
| x | ア 非公式 | y | ア 批判的 | z | ア 腕を振るった |
| | イ 不可分 | | イ 普遍的 | | イ 楔 ^{くさび} を打ち込んだ |
| | ウ 未完成 | | ウ 危機的 | | ウ 口火を切った |
| | エ 無秩序 | | エ 支配的 | | エ 手綱を締めた |

問四 傍線部 A 「子ども本位」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

- ア 子どもは国家に尽くす義務があるため教育が必要であるとの風潮に抗して、「子ども本位」が主張された。
- イ 大正期に隆盛した児童文学や同じ頃に創建された学校の教育では、「子ども本位」が前面に押し出された。
- ウ 夫婦の実質的な平等を説くのは難しかったために、その代わりとして「子ども本位」が主張された。
- エ 「子ども本位」だけでなく「妻本位」も合わせて唱えられることで、母親の母性が称賛されるようになった。
- オ 「子ども本位」が押し出されたことで、主婦はさらに多忙になり様々な現実的な問題に直面することになった。

問五 傍線部 B 「青鞥」に集った女性たち」の主張や実践として適切なものを、次のア～オのうちから二つ選びなさい。

- ア 女子高等教育機関で行われていた良妻賢母を育てるためのカリキュラムでは、「個人」として経済的に自立できる職業に就けないと批判した。
- イ 女子高等教育を受けても家庭に結びつけられることに大きな抑圧を感じ、良妻賢母であることを求める社会のあり方を批判した。
- ウ 夫婦の「愛」ではなく「婦人の真生活」のために雑用に応じ夫に仕える女性の結婚生活を、受け入れ難いものとして激しく批判した。
- エ 当時としては斬新だった同棲や親の意に反した結婚を実践することで、家庭の秩序や風紀を破壊していくことを主張した。
- オ 貞淑な妻であることを求める現状に対して「個人」としての自覚を持つことを表明し、自由な恋愛を主張し実践することもあった。

問六 傍線部C「評論家の岩野（遠藤）清」とあるが、筆者は岩野がどのようなことを主張したと述べているか。最も適切なものを次のア～オのうちから選びなさい。

- ア 家庭内で衝突する可能性があっても個人としての妻の権利が認められるべきであること。
- イ 家庭における愛の結びつきよりも妻の個人としての行動が優先される必要があること。
- ウ 夫婦間で相手を圧迫することがあっても妻としての個人主義を貫き通す必要があること。
- エ 夫婦の永遠の愛に対する不安から逃れるためには相互の理解と同情が重要であること。
- オ 夫婦の愛を維持するためには個人を抑えた不断の努力が維持されるべきであること。

問七 傍線部D「母性保護論争」について述べた次のア～カのうちから、適切でないものを一つ選びなさい。

- ア 与謝野は、国家による保障がなくとも妊娠出産できるように、女性は経済的に自立する必要があるとした。
- イ 与謝野は、すべての女性が経済的自立に必要な労働能力を身に付けるために、国家が貧困女性を支援することを認めた。
- ウ 平塚は、母親の経済的自立は困難であるため、妊娠・出産や育児期には国家が経済的に女性を保護すべきであるとした。
- エ 平塚は、国家が育児を公的事業と捉え母親を支援することで、家庭と仕事の間で苦しむ女性が救われるとした。
- オ 山川は、女性の経済的自立も経済的保護もいずれも重要であるが、それでは女性の問題は根本的に解決しないとした。
- カ 山川は、女性に家事という労働を押しつけて立場を弱くしている、資本主義経済の構造にこそ問題があるとした。

問八 次の一文が入る最も適切な箇所を、本文中のⅠ～Ⅴのうちから選びなさい。

かわりに彼女たちが依拠したのが「母」であることだった。

II

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(四五点)

なぜ人間は、こんなにも気前よく隣人に食物を与えるのだろうか。チンパンジーやボノボも食物を分配する。しかし、食物の所有者は明らかに分配をためらうし、執拗に乞われなければ分配しない。その惜しみつつの分配に優位者の共存への願望や抑制が垣間見えるわけであるが、ここが人間の分配とは明らかに違うところだ。人間の社会では、人前で分配を惜しんだりしない。(1)嬉々として、所有者が食物を分け、食事を振る舞うのである。いったいなぜ、こんな不思議な行動が生まれたのだろうか。

さまざまな社会の中でも、とくに狩猟採集社会が食物を徹底的に分配する社会だと言われている。コンゴの森のピグミーも、カラハリ砂漠のブッシェマンも、タンザニアのサバンナにすむハッザも、パラグアイの森にすむアチエも、そして極北の地のハンターであるイスノットも猟の獲物をキャンプの全員で分配して食べる。では、¹狩猟や採集といった活動の中に分配という行為が埋め込まれているのだろうか。

チンパンジーと同じく、現在の狩猟採集民でも狩猟するのは常に男である。チンパンジーの狩猟の成功率はオスの数が多いときに高く、そして発情メスがいるとオスたちは集まる傾向にある。獲物を手にしたオスは、それを同盟関係にあるオスや発情したメスに分配しようとする。だから、チンパンジーの狩猟や肉の分配はオスの繁殖戦略として理解できるという考えがある。同じように、人間の狩猟活動も互酬性と男の繁殖戦略として理解可能であるとする説がある。パラグアイ、アチエの女たちは優秀なハンターを好む。だからたくさんの獲物をしとめてきたハンターは多くの恋人ができる。分け前が少なくても、子孫をたくさん残すことができるので、労力はきちんと報われている。ハンターたちはそれを知っているので、いつでも気前よく狩りの獲物をみんなに差し出すというわけだ。しかし、この説がすべての狩猟採集社会に当てはまるわけではなさそうだ。別の社会ではハンターたちはもつと控えめだし、女たちは狩りの腕前だけで男を選んだりしない。

分配を互酬的な行為とみなす説もある。狩猟採集で得られる食物は一度にたくさん得られないし、貯蔵しにくい。だから自分の必要以上に獲れたときには分配し、自分が得られないときに分配を受けられるようにしておく。不安定な食物環境にある社会における一種の保障システムなのではないか、という考えである。(2)、人間の食物分配とはお返しを期待し義務づける互酬性に裏打ちされた行為とみなすことができる。はたしてそうだろうか。

食物を交換することは現代社会で当たりまえのように行われているが、マルセル・モースは交換という行為が生ずる以前に贈与という行為があったと考えた。贈与はそれを受け取った側にある種の負い目を感じさせ、相応のものを贈り返す行為を生み出す。チンパンジーと違って、積極的に他者に食物を与える人間の行為はまさに相手に X を感じさせ、結果的に交換を成立させる行

為なのかもしれない。

しかし、タンザニアのハッザを研究したジェームズ・ウッドバーンは、^{II}狩猟採集民の分配は互酬性や交換といった概念では説明しきれないという。分配が互酬性に基づいているなら、分配を受けた者がそのお返しをすることが義務づけられ慣習化していなければならないのだが、そういった例は存在しない。また、食物の所有者が分配するとは限らず、肉でもハンター以外の者が分配することが多々ある。イヌイットでも、食物の分配には交換がなく、食物の所有者ではない第三者が分配したり、一方的に移譲されたりすることが多く、分配を要求することもあまりないという。

一方、中央アフリカの熱帯雨林にすむピグミーやカラハリ砂漠にすむブッシュマンでは、狩猟によつて富が偏在しないような規範が社会のすみずみに行き渡っていると考えられている。コンゴ民主共和国のイトウリ森林にすむムブタイ・ピグミーでは、大きな獲物をしとめたハンターがまったく興奮の色を見せず、静かな態度でキャンプに戻ってくるという。ちよつと変わった槍の持ち方をしていることを除けば、ふだんとまったく変わらぬ様子で目立たぬように振る舞うのがハンターの慣わしなのだ。ムブタイでもコンゴのアカ・ピグミーでも、獲物はまずハンターたちの規則にしたがつて槍や銃の所有者、猟に参加した者の間で分配され、それからキャンプの各家族へ分配される。調理した肉はさらに食事の席で分配される。自分に槍があるのにわざわざ他人の槍を借りて猟にいたり、自分も相手もすでにもっている食料までわざわざ分配したりするのだ。まるで分配をすることが目的で狩りをしているように見える。

ブッシュマンも、獲物をしとめたハンターは控えめな態度をとるのがふつうである。キャンプに戻つても、たずねられるまで答えない。翌日みんな獲物を取りにいつてもまったく称賛の声は聞かれない。それどころか、みんな獲物が小さすぎるとか、遠くまで歩かされたとか、口々に苦情を述べるのである。ハンター自身も自分の獲物を取るに足りないものであることを認め、申し訳なさそうな態度をとったりする。これはむしろシヨークである。ブッシュマンたちは肉を平等に分配し、その幸福を存分に味わうわけであるから、ハンターの仲間に対する貢献は高く評価している。しかし、そこで獲物をしとめたハンターが威信を集めないように、節度ある振る舞いを要求するのである。

^{III}長らくピグミー社会の研究を続けてきた丹野正は、彼らの社会が「分け与える」ことではなく、「分かち合い」(Sharing)の精神によつて特徴づけられることを指摘している。ピグミーやブッシュマンの分配は、所有者が食物を与え、受け取る者がその所有を認めているわけではない。むしろ、所有することが徹底的に避けられているというのである。誰が獲得してきたものであれ、それはキャンプをともにする人々の間で分かち合われ、ともにされなければならない。ブッシュマンの食物分配や料理について調査を行った今村薫は、分配は分かち合いの一つの側面に過ぎないという。女たちは料理を作り仲間に配りながら、親密な関係にあることを確認していく。ときには同じ料理

をやり取りし合うこともある。手助けが不要な些細な作業でも、多くの人が関わり、協力し合う。ただか白一杯の野草をひいて料理するのに、八人が物を提供し、一〇人が作業を行い、一三人が食べた、と今村は記している。その過剰なやり取りはもはや実用の範囲を超えており、そこには分かち合うことによつて生を確認し合う儀礼の場のような雰囲気を感じられるという。

アカ・ピグミーの猟と分配を調査した竹内潔は、彼らが肉を直接手渡さないことに注目した。猟の後、獲物のまわりでは切られた肉が集まつてきた者に分け与えられるが、肉は放り投げられるのがふつうだという。また女性がバスケットに詰めてキャンプへもち帰つた肉を、葉にくるんで仲間的小屋までもつていき、小屋の上に置く。受け取るほうは表情も変えずに、投げられた肉を包んだり、置かれた肉を小屋の中にもつていく。分配された側がほとんど感謝の意を表現しないところがいかにも素つ気なく感じられるという。それは分配に際して二者間の人格的な贈与関係を排除しようとする彼らの作法である。肉の分配は、与える「私」と受け取る「あなた」という二者関係のなかで完結するのではなく、同じキャンプに生活し、ともに狩りをする「われわれ」というコンテキストにおいて参与者にもたらされることを表現する営為であるというのだ。竹内はそれを、モースの「負債のイデオロギー」に対して「共在のイデオロギー」と呼んだ。

狩猟採集民の分配は、まず食物を「われわれ」のもとへ集めて、それを平等に分けるという行為である。そこでは所有という意識を意図的に消そうとする努力が払われている。しかし、ボノボの食物分配行動を研究した黒田末寿は、分配がコミュニケーションとしての意味をもつためには、分配物の所有者が明確でなければならないという。チンパンジーやボノボの分配は、誰かが食物をもつてから始まる。手にもたない食物はまだ所有がはっきりしないので、誰が取ってもよい。彼らの分配は食物をもっている者に誰かが近づいて、それをせがむことによつてのみ発現するのだ。だから、彼らは行為そのものが目的なのではなく、「特定の相手との行為」を追求しているのだと黒田はみなしている。つまり、^{IV}狩猟採集民が物を通じた二者間の関係が生じるのを嫌うのに対し、類人猿はそれを求めているのだといえる。

ボノボは分配をせがむことによつて所有者の自制を提案している。そこで所有者は自分の中の他者と出会うことになる。他者の欲求を自己の欲求と同じレベルで感じ、それを共存させるために分配に同意する。それを黒田は「共感」の芽生えととらえた。そして、チンパンジーやボノボの食物分配に表れる心の動きは、自己の客観視や他者理解、所有、価値などの出現と連動しており、言語によらない規範や自然制度につながる可能性をもっていると指摘している。

では、狩猟採集民の「共在のイデオロギー」はなぜ食物を介した二者間のコミュニケーションを否定しようとするのだろうか。それは、彼らが人々の関係に及ぼす食物の影響をよく知っているからであろう。黒田は、所有は物に所有者の人格を刻印することであるという。いったん所有された食物は、分配を介して食物とともに、いや食物が食べられた後も、与え手の存在を受け手に記憶さ

せ続ける。二者間の特別な関係は共在の場を壊す危険をはらんでいる。狩猟採集活動によって食物を現場から引き離し、それを操作することができるようになった人間は、食物を政治的な手段にすることを自らに禁じたのである。

昼行性の真猿類は、主として植物性の食物を利用して進化してきた。社会生態学が示唆したように、彼らの社会性には植物性の食物をめぐる仲間との競合をさまざまな方法で解消してきた歴史が織り込まれている。食物は動かすものではなく、果実や葉や樹皮のある場所でそのまま口へ運ぶものだった。ヒトやニホンザルのように頬袋のあるサルたちはいったん食物を頬袋に入れ、それを安全な場所で口にもどしてゆっくり食べることができる。だが、それを仲間に与えたり、仲間といっしょに食べることはない。頬袋のない類人猿は常に食物のある場所で、食物の分布にしたがって分散し、仲間の動きに気を払いながら食べねばならない。

だから、サルや類人猿たちの食物をめぐる競合は、基本的に食物のある場所をめぐる競争である。食物のある場所が限られていれば、誰かがどいて、誰かがそこを占有する事態が生じる。その行為に個体間の優劣関係が反映されるのである。^V霊長類の多くは場所の占有をめぐる葛藤を、優劣関係を反映させることで解消してきたといえる。類人猿はその葛藤に優劣関係を反映させずに、分配行動というコミュニケーションを生み出した。チンパンジーでは、オスによって肉の分配がすでに政治的な手段として使われているという指摘もある。

人類の食生活の顕著な特徴は、わざわざ食物を仲間のもとへもってきて食べるということだ。その場で食べられる食物も、それほど量のない食物も、ヒトは消費せずにもって帰ることが多い。それは本来の食物の分布を人為的に変え、他者の前でさまざまな取り方を提示できるということの意味する。サルたちのように食物の取り方に互いの社会関係を反映させるのではなく、食物を操作して社会関係を作るのである。サルたちにはこういうことができない。人間が餌をやるような状況では餌が動いてしまうので、ニホンザルたちは優劣関係を反映させることができずに混乱してしまう。だから、優劣の確認をしようとして攻撃行動が頻発するのである。人間は食物を用いて親しさも、敵意もしめすことができる。しかし、それが勝手に行われれば、人間関係は混乱し、嫉妬や憎悪が渦巻いて社会は不安定になる。だから、どの社会でも食物の分配には細かなルールやエチケットが課せられているのである。狩猟採集民はその影響を極度に抑えた社会を作ったといえる。

(山極寿一『暴力はどこからきたか 人間性の起源を探る』一部改変)

問一 空欄 (1) ・ (2) に入る最も適切な言葉を、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

- | | |
|---------|---------|
| 1 ア さらに | 2 ア すると |
| イ しかし | イ ただし |
| ウ だから | ウ だが |
| エ むしろ | エ そこで |

問二 傍線部 I 「狩猟や採集といった活動の中に分配という行為が埋め込まれているのだろうか」とあるが、狩猟や採集について筆者が述べていることとして適切でないものを、次のア～オのうちから一つ選びなさい。

- ア ハンターたちが控えめな狩猟採集社会の場合、女たちは狩りの腕前だけで男を選んだりしない。
- イ 人間が狩猟で得た食物を惜しみつつ分配するさまには他者との共存への願望が垣間見える。
- ウ 人間の狩猟活動はチンパンジーと同様に男の繁殖戦略として理解可能である。
- エ アチエのハンターは獲物を振る舞うことで多くの恋人を作り、子孫を残すことができる。
- オ 人間は狩猟で得た過剰な食物を分配し、得られぬときに分配をうけられるようにしているという説がある。

問三 空欄 に入る最も適切な言葉を、次のア～オのうちから選びなさい。

- ア 心理的負債
- イ 身体の疲弊
- ウ 後悔の気持ち
- エ 畏敬の念
- オ 精神的屈辱

問四 傍線部Ⅱ「狩猟採集民の分配は互酬性や交換といった概念では説明しきれない」とあるが、分配にまつわる行動として本文の内容に合致しないものを、次のア～オのうちから一つ選びなさい。

ア ムプテイ・ピグミーでは大きな獲物を仕留めたハンターが興奮の色を見せず、ふだんと変わらぬ静かな態度でキャンプに戻り目立たぬように振る舞う。

イ アカ・ピグミーでは獲物の所有者であるハンターに槍の所有者や猟の参加者から感謝の意が述べられた後に肉が切り分けられる。

ウ ブッシュマンのハンターは獲物を仕留めても称賛されず、取るに足らない獲物を取ってきたことを認め、申し訳無さそうな態度をとることがある。

エ イヌイトの社会では食物の所有者ではない他者に対して、しばしば一方的に食物が移譲される。

オ アカ・ピグミーの社会では、自分に槍があるのにわざわざ他人の槍を借りて猟に行くことがある。

問五 傍線部Ⅲ「分かち合い」(Sharing)の精神を表すピグミーやブッシュマンの行為の例として適切なものを、次のア～オのうちから二つ選びなさい。

ア たかだか臼一杯の野草の料理でも多くの人に関わり、協力したうえで皆で食べるといった実用の範囲を超えた過剰なやり取りをする。

イ 得られた肉を「与える」私と受け取る「あなた」の間に生じる贈与関係を通じ、お互いの生を確認し合う。

ウ 狩猟で食物を得た者は、それを第三者に平等に分配することで、自らを高く評価するよう要求する。

エ 分配する側は切った肉を葉にくるんで小屋の上に置き、受け取る側は感謝の意を表現せず、小屋の中に持っていく。

オ 所有者がはつきりしない食物を誰かが拾い上げたと同時に、第三者が食物の取得者に近づき、それをせがむ。

問六 傍線部Ⅳ「狩猟採集民が物を通じた二者間の関係が生じるのを嫌う」とあるが、その理由について述べた次のア～オのうちから、適切なものを二つ選びなさい。

- ア 二者間の関係が生じることで常に特定の相手から分配をせがまれ続けることとなり、共存が困難になるから。
- イ 所有者が明確な食物の分配を通して二者間の特別な関係が形成されると、共在の場が壊れる危険があるから。
- ウ 食物の所有者が明確になり二者間の関係が生じてしまうと、相手の動きに必要以上に気を払わなければならないから。
- エ 二者間の関係だけでは、狩猟採集民が最も重要視する食物の分配、調理、食事を通して醸成される「共感」が芽生えにくいから。
- オ 狩猟採集活動で得られた食物を介して二者間の関係が生じると、食物が政治的な手段として用いられることになるから。

問七 傍線部Ⅴ「霊長類」の食生活について述べた例として最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。なお、霊長類とはサル、類人猿、人類を含む霊長目の哺乳類の総称である。

- ア ニホンザルの社会では給餌がされると、その際だけ優劣関係が解消され、採食が始まる。
- イ ヒヒやニホンザルは食物を頬袋に入れ、それを安全な場所で仲間といつしよに食べる。
- ウ 人類は食物の分布を人為的に変えることで、食物の取り方に応じた社会関係を作る。
- エ 人類以外では、食物の分配が政治的な手段として用いられることはない。
- オ ニホンザルは人間から餌をもらうと、群れで嫉妬や憎悪が渦巻き、攻撃行動が頻発する。